

正文に転用された

皇后宮職（紫微中台・坤宮官）反故文書

Scrapped Instruments of Kougou-gūshiki (Shibi-chūdai, Kongūkan) Diverted to the Official Text

山本 幸男

はじめに

吉田孝氏は、「律令時代の交易」⁽¹⁾の中で正倉院文書の分類を試み、「乙」「写経所におかれていた文書」群の「A」「写経所関係文書」内(四)「写経所に来た文書」には、造東大寺司と皇后宮職（紫微中台・坤宮官）⁽²⁾の反故文書があることを例示された。つまり、両官司で反故にされた文書の背面が、写経所宛の正文に再利用されていたのである。正文には、背の白い未使用の紙を使うのが普通なので、これはルーズな伝達法といわねばならないが、吉田氏によれば、こうした反故文書の転用を行っていたのはこの二つの官司だけであった。⁽³⁾^(補注)造東大寺司は写経所の所管官司、また淵源をたどれば写経所は皇后宮職の一部局であったという関係が、その要因となっているのかも

しれない。しかし、造東大寺司はともかく、皇后宮職の場合は事情を異にする。というのは、当初、皇后宮職の管下にあった写経所は、造東大寺司の成立とともにその配下に移管され、皇后宮職とは官制上別個の組織になるが、反故文書を利用した正文は、この移管後の写経所に宛てられている（後述）からである。従って、皇后宮職（紫微中台・坤宮官）が何故にルーズな伝達法をとったのかという問題は、反故文書の再利用のあり方とともに、移管後の写経所との関係を知る上でも興味あるテーマといわねばならないだろう。

小稿は、このような関心のもとに、皇后宮職（紫微中台・坤宮官）反故文書の背面が写経所宛正文に転用されたことの意味を考えようとするものであるが、まず、関係文書の整理と検討を行い、状況の把握に勤めることにしたい。

一 関係文書の検討

(1) 例示された文書

吉田孝氏が、当該文書として例示されたのは次の三通である。

A〔第一次文書〕天平二十一年二月十日付掃部所解（統修第二二卷、三九六～三九七）⁽⁴⁾

〔別案〕以二月十五日、申卿尊了、宜施行、宣之、少属田辺牛養

掃部所解 申請年料葛野席直銭事

合冊一貫八百七十五文 ^(別案)「且充廿四貫五百文付石万呂少属土師」
_{巳勝}

卅貫広席一千五百張直牧別廿文

一貫八百七十五文運駄卅七匹半賃直料匹別五十文

十貫狹席直

右、依例所請如件、

天平廿一年二月十日

〔第二次文書〕十二月二十五日付池原禾守牒（十四四一）

牒写経所

請物部角折

牒、件人依常悔過事、自今月

廿五日、至来正月十五日、所請如件、

預可備物、宜急令参、故牒、

十二月廿五日池原禾守牒

B〔第一次文書〕天平勝宝六年十一月十一日付吉野百嶋解（統修

第四二卷、四三一）

一牧裏事（僅欠）

右、依去八月三日大風雨、河水高漲、河辺竹葉被漂仆埋、但以外竹原并野山之草甚好盛、

一牧子六人 _{長二人丁五人}

右、率常件人、令見妨守并上下御馬以次

苞承、望請、於国司詔給牒書、而如常正役、

欲得駈使、

一給衣服而欲令仕奉事

右、件牧子等、為貧乏民、其無衣服率仕

奉醜、

以前事条、具録如件、仍謹請裁、以謹解、

天平勝宝六年十一月十一日

知牧事擬少領外從八位下吉野「百嶋」
_(自署)

（余白に天平宝字八年三月二十四日付と見られる吉祥悔過所

解案（十三四）あり）

〔第二次文書〕十二月十五日付池原禾守牒（二五三〇～三〇一）

牒送

標紙陸伯張

右、付紀主人送、如上件、

十二月十五日

池原禾守

且付錢貳仟肆伯文

吉田氏は、論文の性格上、論証ぬきでこれらの文書をあげられた。しかし、Aについては鬼頭清明氏が検証を加え、第一次文書・掃部所解の別筆に見える二人の少属は皇后宮職の第四等官と推論されること、第二次文書は天平宝字二年（七五八）から五年にかけて坤宮官少疏ないし大疏であった池原禾守の牒であることから、掃部所解は「坤宮官の前身にあたる皇后宮職を宛先として提出され」、「それが、そのまま皇后宮職から坤宮官へと保存、継受されていたのではないか」とされた。一方、Bについて西山良平氏は、第二次文書がAと同じく池原禾守牒であることから、鬼頭氏の見解を念頭にし、第一次文書・吉野百嶋解も「皇后宮職（紫微中台・坤宮官）で反故にされた文書」の一部である可能性が大きいとされた。⁽⁵⁾

男 幸 本 山

このように、鬼頭氏と西山氏の検証により、Aの掃部所解は皇后宮職へ、Bの吉野百嶋解はその後身の紫微中台へと宛てられ、いずれもそのまま坤宮官へと保存・継受されたと考えられるようになったが、ここで注意したいのは、その両者の背面が池原禾守の牒に使用されていることである。それが案文ではなく正文としてであることは、禾守の署が、紙背に切封の認められる（天平宝字）四年十一月八日付池原禾守牒（統修別集第七卷、『大日本古文書』未収）のものと同じである点より判断される。⁽⁷⁾ この二通の禾守牒はいずれも年紀を欠くが、Bの方は、左端に記された錢二四〇〇文の送付が、光明皇太后の周忌斎（天平宝字五年へ七六一）六月七日）に供する

一切経書写料の納帳、すなわち後一切経料雑物納帳の天平宝字四年十二月十五日条の記事「收納錢貳貫肆佰文墨直呂政所請案檢納加件、使紀主人」⁽⁸⁾（十四四三）に対応しており、またAで所請する物部角折は、天平宝字四年十月から翌五年三月にかけて膳部として写経所に出仕する人物に相当すると思われるので、A・Bとも天平宝字四年の文書と判断される。つまり、反故文書の正文への転用が、この年の十二月に行われていたという時間的な特定が一応なされるのである。

ところで、この天平宝字四年には、池原禾守の名のもとに写経所に宛てられた啓・牒・符があと四通存在する。表1は、AとBも含めてそれらを一覧化したものである。これより、③④の背にも文書（年未詳）が認められA・Bとの類似が予想されるが、これらの文書は、B吉野百嶋解の余白に書き込まれた吉祥悔過所解案に関連をもつと思われる。『正倉院文書目録』二（統修）⁽⁹⁾によると、この吉野百嶋解の右は統修別集第一〇巻裏の天平宝字八年三月二十四日付と見られる吉祥悔過所解案（十六四六～四七）に接続することが推定されており、その解案の文面は百嶋解の左に書かれた解案に続くとされている。つまり、反故文書を転用して写経所に宛てられたBの禾守牒は、天平宝字八年三月に至って再び背面を案文作成に使用されたのである。その吉祥悔過所解案は、三月二十四日から四月八日まで、の仏像及び聖僧の供奉料を申請するもので、そこに示された期日は、③④背の注文のそれとはほぼ重なり内容的な繋がりが予測される。また、このBの池原禾守牒は、②③④Aとともに時間的な連続

表 1

池原禾守の文書（写経所宛）				紙 背 文 書		
天平宝字 4 年	種	正倉院文書	『大日本古文書』	年 月 日	文 書 名	『大日本古文書』
① 正. 19	啓	正集44	4-407		〔空〕	
② 11. 8	牒	統修別集 7	未 収		〔空〕	
③ 11. 19	〃	〃	4-453		吉祥悔過所注文 (3月16日～4月2日)	16-498～499
B 12. 15	〃	統修42裏	25-300～301	天平勝宝 6.11.11 (天平宝字 8. 3.24)	吉野百嶋解 吉祥悔過所解案	4-31 13-117
④ 12. 21	符	統々修43-22	14-449～450		写経用米下充注文 (3月20日～4月1日)	14-450
A 12. 25	牒	統修22裏	14-451	天 平 21. 2.10	掃部所解	3-196～197

(注) ④・符は、『大日本古文書』では、島政所符と表記されるが、ここでは禾守の文書として扱った。

性の中にある(表1参照)ので、写経所ではこれらの文書をまとめて保管していたと見られるが、それが天平宝字八年三月になって一括して反故となり背面利用にまわされていた可能性が大きい。つまり、吉祥悔過所解案と二つの注文は、ほぼ同時期に作成されたのではないかと思うのである。となると、禾守の牒・符への反故文書の転用はAとBだけであったことになり、改めてその時期の特定が可能になるだろう。

以上、AとBの第一次文書についての先学の検証結果を略記し、さらに第二次文書について私見を少し付け加えたが、実はもう一通、吉田氏が当該文書として例示されたものがあつた。少し長くなるが、次に全文をあげておく。

C〔第一次文書〕天平勝宝二年月二十二日、二十六日、二十九日付浄清所解并進送文(第6紙背、統々修第四三帙第二二卷、三42、第5頁1紙背、同第四四帙第三卷裏、十一350頁353)

浄清所

進漬菜老缶
桃員三斗
桃交水基者

天平勝宝二年七月廿二日高屋向 御殿坊

浄清所解 申作土器事

合式人 单功老伯柴拾捌人

讃岐石前 相作堀土運打新築備并進京 单功八十九人

借馬秋庭女 作手 单功八十九人

(紙
下
目)

(5 背)

(6 背)

田坏二千四百口 功廿四人^々 別日百口「十口充錢三文」(異筆、以下同)
鏡形九百九十口 功卅三人^々 別日卅口「十口充八文」
片塊三百六十口 功九人^々 別日卅口「十口充五文」
片佐良六百六十口 功廿二人^々 別日卅口「十口充八文」
小手洗六口 功一人^二 日充六文
惣作器肆仟肆伯拾陸口

[白い紙]

淨清所(半欠)

進新米尅斗

七月廿六日坂上比治加太

(4背)

淨清所解 申返上前裳并更請物事

返上物

(3背)

「前裳二条^{長各三尺}」洗布一条^{長三尺五寸} 振布一条^{長二尺五寸}

右、依有損破、返上如前、

又請布尅丈捌尺 小松式^(束)□(上記二字僅存)

淨清所解 申幸行雜用事

用物

(2背)

一御飯料米五斗^{新米一斗} 又進米五升^{新酒二負} 毘数一斗九升

古酒一斗 古糟一負 毘数一斗 甘漬瓜一塊 甘漬茄子一塊 桃子

漬一塊 大豆漬一塊 水葱漬一塊 青蛆一塊 葵蛆一塊 実一塊

醬瓜一塊 末醬瓜一 古漬筋一塊 古漬路一塊 麦生菜一塊

芹漬一塊 蕨漬一塊^(虎伏) 唐丈漬一塊 多々良比壳一塊 醬瓜一塊
末醬茄子一塊 薑一塊 糟瓜一塊
一人給料米四斗 古蛆一叩戸 水葱并芹漬一叩戸 薪二荷 松一束
一供養料古蛆一叩戸 筋并露漬一叩戸 甘漬瓜茄子一叩戸 薑一塊
葵蛆一塊 芹并麦生菜一 比良加 末醬茄子 囊荷 糟瓜一 比良加

(1背)

收納物
商布陸拾段

右物、自大郡宮、請運如件、

一損失物

負毘三口 明櫃二合 篋方二具 荷繩布一条 叩戸一口 煎坏二口
水毘十九合 土鏡形四口 片佐良四口 酒坏二口 小高佐良二口
右、以今月廿六日、大郡宮幸行雜用并收納物及損失等、

勘注如前、謹解、

天平勝宝二年七月廿九日高屋奈美貴

〔第二次文書〕 天平宝字二年六月二十一日、二十二日、二十五
日付自宮來雜物繼文(十一 347-350)

(題籤表)

自宮來雜
物繼文

經師清衣參具^{各袍一} 汗衫一 袴一 襪一 抹一

膳部衣肆具^{各袴染衣一} 袴一 驅使丁衣捌具

各黃衣一 袴一 手巾拾条

(1)

右、附舍人山乙万呂進送、且

宝字二年六月廿一日秦月麻呂

〔（遺棄、以下同）〕
「檢主典阿都宿祢」雄足」

清衣捌具

五具各袍 汗衫一 袴一 抹一

二具各袍 袴一 湯帳一 抹一

一具袍 袴一 湯帳一

右、付山乙万呂且進送、

六月廿一日秦月万呂

「檢主典安都宿祢 案主建部広足」

經師清衣參拾具

橡袍卅領 袴卅膏

汗衫卅領 襪卅膏並帛

湯帳卅領 抹廿兩並布 縫糸

右、付舍人山乙万呂、三国広山

等進送、

六月廿二日秦月麻呂

「檢主典安都宿祢」

〔白い紙〕

清衣拾肆具各別袍 領一 汗衫一 領一 袴一 口一 湯帳一 抹一 兩一

一汗衫參領 襪參膏 抹袴領

(5)

(4)

(3)

(2)

右、先送所欠加入者、付山乙万呂

一遺清衣袴具

右、今追進送、

六月廿五日秦月麻呂

「檢主典安都宿祢」

「案主建部広足」

〔空〕

(6)

このCは、続々修編成時に第二次文書をもとに整理されたもので、現状では第1紙右端に「自宮来雜物繼文」と記す題籤付きの往来軸が繋がっている。また、第4紙と第5紙の間には白い紙がはさまれ、この間に欠失のあることを示しているが、これについては、続々修第四三帙第五巻に収められる写千巻経所錢并紙衣等納帳（十三243～252）が参考になる。この帳簿は、金剛般若経一〇〇〇巻の書写料として天平宝字二年六月二十一日から八月二十四日にかけて写経所に収納された錢・浄衣・紙・軸・綺などの数量を逐一記入したもので、浄衣の収納に関する記述は、表2に示したようにCのものと全く一致している。これは、Cの継文を手元において書かれた結果だと思われる。従って、継文には、帳簿に見える六月二十三日の収納記事に対応する注文があったはずで、それが第4紙と第5紙の

表 2

月 日	写千巻経所銭并紙衣等納帳	自宮来雑物継文
6. 21	経師浄衣 3 具 膳部衣 4 具 駈使丁衣 8 具 手巾10条 (又納)浄衣 8 具	経師清衣 3 具 膳部衣 4 具 駈使丁衣 8 具 手巾10条 清衣 8 具
22	浄衣30具 縫糸	経師清衣30具 縫糸
23	雑使浄衣 3 具 袜10両	
25		清衣14具 汗衫 3 領 襪 3 着 袜 1 両
26	浄衣14具 汗衫 3 領 襪 3 着 袜 1 両 (「以廿五日來今進納之」)	
7. 3	浄衣 1 具	

(注) 浄衣の内訳は省略した。

宮来雑物継文は、右端に題籤付の往来軸をもち、七紙程度の注文がらなっていたようだが、その注文の背に天平勝宝二年(七五〇)七月の浄清所解並びに進送文が認められるのである。

さて、吉田氏は、このCの第一次文書を浄清所から紫微中台宛、第二次文書を宮(紫微中台)から写経所宛と判断し、先のABともにも当該文書として例示された。⁽¹⁴⁾しかし、Cを詳しく検証された鬼頭氏は、第二次文書が紫微中台からきた文書の正文であるかどうかは疑問とし、六月二十一日の二通の注文が二紙にわたって書かれた浄清所解(天平勝宝二年七月二十九日付)を分離せずそのまま背面

間の欠失文書に相当すると考えられる。また、この帳簿との対応関係を重視すれば、さらに七月三日の記事に見合った注文もあったことになる。もしそうなら、小杉本では第5紙背の浄清所解の右に続々修第四三帙第二二巻所収の浄清所進送文(第6紙背、三42)が続くので、この用紙(紙面は空)の左にそれが繋がるのである。このように、自

に記されていることから、この二通の注文は造東大寺司の案文と考えるべきであるとされた。もし正文ならば、浄清所解の継目をはがすなどして二紙に分け、一紙ごとに注文を作成したはずというのが鬼頭氏の考えで、これにより第二次文書は正文でなく案文と判断されたのである。では、第一次文書の方はどうかという、七月二十九日付浄清所解には大郡宮行幸の記事があり、それは天皇ないし皇太后に關係するものだから浄清所は内裏か紫微中台の被管と考えられること、また、正倉院文書の中には吉田氏の整理によっても内裏から写経所へきた文書は存在しないので、浄清所の文書は前掲Aの掃部所解の例からいって宛先は紫微中台であり、その後そこで反故になつて造東大寺司ないしは写経所へ払い下げられたものと考えられた。吉田氏は、この鬼頭氏の指摘をうけ、Cの例示は誤りとし削除されたのである。⁽¹⁵⁾

しかし、私見によれば、Cの例示は妥当であったと考える。これを第二次文書について見ると、鬼頭氏が造東大寺司の案文とした理由は、前記のように六月二十一日付の二つの注文が二紙よりなる浄清所解の背面をそのまま利用していたことによるが、これは必ずしも氏の考えを支持するものではない。というのは、二十一日に宮(紫微中台)から送付される浄衣の数量が何らかの事情で追加されることになり、既に作成済みの注文の左に貼り継がれていたもう一枚の反故紙に追加分の注文が書かれ、それがそのまま写経所に宛てられたと見ても不自然ではないからである。また、第二次文書を案

文と考えると六月二十二日付注文の紙背文書が問題になる。つまり、二通の文書のうち、浄清所解の方が尾欠の状態になっているのである。これは、注文作成時に、貼り継がれた状態にあった反故文書を適当な長さに切断したためであるが、これを案文と見なすと、造東大寺司写経所では、正文一通ごと反故文書を切断して案文を作り、それをまた先の案文の左側に貼り継いでいたことになる。しかし、これは手間のかかる作業である。むしろ、浄清所の一連の文書が紫微中台からの払い下げであるならば、恐らく各文書は完形のまま貼り継がれた状態にあったのだから、写経所の方でも浄衣収納という特定内容の案文を書き継ぐ場合は、無用な切断はせずそのまま背面を利用したのではなかろうか。⁽¹⁶⁾ 六月二十二日付注文の紙背文書のあり方は、宮の側で注文に見合った長さに反故紙を切断した結果と見た方がよいと思う。また、前記の写千巻経所銭并紙衣等納帳とこのCの第二次文書の関係を念頭にすれば、浄衣の送進注文は納帳に利用されるいわば実務処理の文書であった。そのような一過性の文書のために、わざわざ案文が作られていたのかどうかも疑問といわねばならない。⁽¹⁷⁾

このように、第二次文書を造東大寺司の案文とする鬼頭氏の考えには無理があると思う。しかし、第一次文書の宛先及び浄清所の性格については異論のないところである。それ故、このCについては、第一次文書は紫微中台に宛てられたもの、第二次文書は反故になったその背面を正文に転用し、宮（紫微中台）から写経所に宛て

られたものと評価できる。つまり、吉田氏の判断は妥当であったと考えるのである。

(2) 追加すべき文書

皇后宮職（紫微中台・坤宮官）で反故にされた文書の背面が、写経所宛の正文に再利用されていた実例として吉田孝氏が示されたのは、以上に見た三通であった。しかし、管見によれば、あと二通類似の文書が存在する。以下、それぞれについて検討を加え、当該文書を含むべき理由を述べておきたい。

D〔第一次文書〕天平勝宝三年十一月二十八日付絞荏油雇人功食用銭等解（続々修第四三帙第二二巻裏、十二¹⁸⁰）

雇人功并食用銭一千五百卅文 （元亨直銭者）

絞荏一石人功食用一百十文

薪一駄 （直冊文） 雇役単功三人功卅六文 （人別十二文）

食米六升 （直冊文） 塩六瓶 （直一文） 鰯十八隻 （直三文）

以前、被今月二日牒、謹依牒旨、令絞荏油、具録之數如件、謹解、

天平勝宝三年十一月廿八日舍人正八位下尾張連「男足」（自署）

佑從六位上行六人部連「佐婆麻呂」（自署）

「比良麻呂案」
「申令了」

少疏高丘比良麻呂」

〔第二次文書〕七月十五日付安宿豊前銭進送文（二十五²³⁰）

進送銭事 （後分）

合肆拾陸貫肆伯伍拾文

右、依請數、進送件、^加

「欠四百三文」^(異筆)

七月十五日安宿豊前

又綺五丈廿九巻料加仕丁一人

「検主典安都宿称 案主建部広足」^(広足筆)

第一次文書は、首部を欠くため発給主体は明らかでない。しかし、末尾に「申令了」との紫微中台少疏高丘比良麻呂の筆があるの⁽¹⁸⁾で、この文書の宛先は紫微中台であったと見られる。

次に、第二次文書が正文であることは、安宿豊前の署が、紙背に切封をもつ九月十一日付安宿豊前状（続々修第四六帙第九巻、二十五²³⁷〜238）のものと同一である点より判断される。¹⁹日付には年紀が書かれていないが、『大日本古文書』はこれを「天平宝字二年カ」と推定する。この点を末尾の勘検（異筆）に名のある安都雄足と建部広足の経歴から検討してみると、雄足が造東大寺司主典の地位にいたのが、天平宝字二年六月から同八年正月頃まで、²⁰広足が写経所案主の地位にいたのは、雄足の主典在任中では同二年六月から九月にかけてであった。²¹つまり、両者が共に勘検に立ち会えたのは、天平宝字二年六月〜九月の期間と考えられるのである。因に、この二人が勘検署名する前掲Cの第二次文書も右の期間内の日付である。年紀を天平宝字二年と見る『大日本古文書』の推定は妥当といえる。

この文書の宛先が写経所であることは、右の勘検署名より明らか

であるが、では発給主体の方はどうか。安宿豊前の地位が明らかでないので、以下これを文書内容から検討しておく。まず、「後分」として送られた錢四六貫四五〇文の性格を見ると、それは、当時写経所で行われていた千手千眼經一〇〇〇巻・新羅索經一〇部二八〇巻・藥師經一二〇巻（以下千四百巻經と略記）の書写に充当するものではなかったかと思われる。写経料物の納入を書き留めた帳簿は一部分しか残っておらず、²³右の錢の収納については明確に知ることはできないが、七月五日から始まる千手千眼并新羅索藥師經料錢衣紙等下充帳では、²⁴十四日までの下錢記事のほとんどに「金剛般若經料用替」とあるのに対し、これ以降は「正分」と記し十八日には一七貫五九三文もの大量の錢が下充されているのが参考になる。「金剛般若經料」とは、この写経に先立つ六月二十二日頃から書写の始まる金剛般若經一〇〇〇巻（以下千巻經と略記）の書写料（錢）に相当する。つまり、七月五日から始まる千四百巻經の書写事業では、当初この千巻經料から用錢の立替が行われたのである。これは写経料錢の供給が遅れていたためで、七月十八日から「正分」の錢が下充されるのは、この十五日付の進送文によって写経所に錢四六貫余が送り届けられたからだと思われる。また、七月の写経所食口案を見ると、この月所用の筆と墨の數量が「先經料」と「後經料」に別けて記入されている。これは、相前後して開始された二つの写経事業を区別するためのもので、「後經料」とは千四百巻經をさすが、四六貫余の錢も「後分」（圈点筆者、以下同）とさ

れるのは、それが「後・経料」に充当する銭であったからであろう。

このように、第二次文書は、千四百巻経料銭の送付を写経所に伝えるものと判断される。となると、その発給主体も自ずから限定されてくるわけで、結論からいうと、それは紫微中台であったと考えられる。というのは、千巻経及びこの千四百巻経に次いで九月十五日頃から始まる金剛般若經一二〇〇巻（以下千二百巻経と略記）の書写事業も、その料銭は紫微中台から供給されており、また千四百巻経書写の場合も、十五日付の進送文に先立って七日頃に、紫微中台から罪料として四七〇文充てられているからである。⁽²⁷⁾ このような一連の書写事業に対する銭供給のあり方からすれば、四六貫余の千四百巻経料も紫微中台からの供給とするのが穏当であろう。つまり、第二次文書の発給主体は紫微中台と考えられるのであり、それは紫微中台で反故にされた文書の背面に書かれた正文と見られるのである。

E〔第一次文書〕天平勝宝二年五月二十六日、六月二十一日、二十四日、二十七日、七月二日、三日、四日、五日、六日付藍園進上文（第10紙背、統修第四三巻裏、二十五8、9、第9紙背、同上、十一280、第8紙背、統修第四二巻、三407、第7紙背、続々修第四六帙第六巻裏、三406、第6紙背、正集第四四巻、三412、第5、2紙背、続々修第四六帙第六巻裏、三409、411、第1紙背、同上、十一323⁽²⁸⁾）

藍園進上

落拾園

葛菁陸拾束 丁道部太鷹

天平勝宝二年五月廿六日倉垣三倉

進上瓜百七十一果 青瓜百卅七果 茄子一斛（僅欠）

龍葵葉六把 蘭一把 載車一両 丁財部結

天平勝宝二年六月廿七日土形人足

藍園進上

藍式拾式園

天平勝宝二年六月廿四日倉垣三倉

藍園進上

茄子伍斗

天平勝宝二年六月廿一日資人倉垣三倉

藍園進上

藍肆拾園 載車二両 一両履車實錢五十文

天平勝宝二年七月六日倉垣三倉

（10背）

（9背）

（8背）

（7背）

（6背）

藍蘭進上

藍肆拾圍

天平勝宝二年七月五日倉垣三倉

(5 背)

(藍蘭進上)

熟瓜肆拾果

菜瓜壹伯貳拾果

龍葵拾五把

蘭貳

青大角豆拾把

天平勝宝二年七月四日倉垣三倉

藍蘭進上

茄子參斛貳斛

天平勝宝二年七月三日

(3 背)

藍蘭進上

藍肆拾圍

天平勝宝二年七月三日倉垣三倉

(2 背)

藍蘭進上

熟瓜捌拾丸

(1 背)

青瓜參伯貳拾丸

天平勝宝二年七月二日倉垣三倉

〔(異筆)
「申了清浜」〕

〔第二次文書〕天平宝字四年十二月四日付食法并經師校生裝潢
等大料雜物下充注文(第1、5紙、11-486、13-489、11、第6
紙、15-85、第7紙、11-489、12-18、第8紙、15-84、第
9・10紙、四45)

食法

一經師并一日料除裝潢大小豆麥糯米生菜直錢

米二升 海藻一兩 滑海藻二分

末滑海藻一合与滑海藻相繼 醬末醬各一合

酢五夕 塩六夕已上六種長充 大豆一合

小豆二合已上二種長充 布乃利一兩 心太伊岐須

各二分已上三種相繼 漬菜二合

生菜直錢二文与漬菜相繼 小麦五合

糯米四合与小麦相繼月中給六度已上九種
隨在不必充

一史生雜使膳部一日料

米一升二合 海藻一兩 滑海藻二分

漬菜二合 醬末醬各六夕 酢四夕

塩四夕

一校生一日料

米一升六合 海藻一兩 滑海藻二分

(1)

(2)

漬菜二合 醬末醬各六夕 酢四夕

塩四夕

一薪十二荷 々別直錢十三文

右法不造永例、暫准彼此、但

随物集、以為増益、

一惣料物

米六十八石五斗二升 五十九石八斗八升白
八石六斗四升黒

海藻二百七十斤 滑海藻六十九斤一両

末滑海藻一石二斗三升 醬末醬各二石八斗二升八合

酢一石五斗四升二合 因同受七斗七升 本醬一斗

大豆二石四斗六升 小豆四石九斗二升

布乃利五十一斤四両 心太伊岐須各廿五斤十両

生菜直錢二貫四百六十文 小麦一石二斗三升

糯米九斗八升四合 薪三百六十荷

右目錄

一米廿一石一斗六升四合 塩二石四斗七升六合六夕

醬一斗七升二合 酢二石六斗六升八合五夕 滑海藻

九斤一両 伊岐須卅一斤十二両 糯米一石一斗九升二合

大豆二石九斗二升 小豆一石七斗三升六合

木綿菜八十斤 錢一貫二百十文

薪百十四荷 在東大寺司

右、去十一月所殘、同充如件、

(6)

一米卅七石四斗一升六合 卅八石七斗七升六合白
八石六斗四升黒

海藻二百七十斤 滑海藻六十斤 末滑海藻

二石二斗三升 醬二石六斗五升六合 （朱筆、以下同）

末醬二石八斗二升八合 宮 小豆三石一斗八升四合

角俣五十一斤四両 心太伊岐須各廿五斤十両

小麦二石四斗九升四合 一石二斗六升四合借用代
一石二斗三升月料

錢四貫四百卅八文 二貫四百六十文生菜直
一貫九百八十八文薪二百卅六荷直

右、今加所充如件、其數滿目錄了、

一米卅九石二斗 海藻百五十三斤十二両

滑海藻卅四斤十一両 末滑海藻一石二斗三升

醬末醬各二石四斗六升 酢一石二斗三升

塩一石四斗七升六合 大豆二石四斗六升

小豆四石九斗二升 布乃利五十一斤四両

心太伊岐須各廿五斤十両 生菜直錢二貫四百六十文

小麦一石二斗三升 糯米九斗八升四合

右、經師裝潢單二千四百六十人十二月大料

如件、

一米十石六斗八升 海藻卅八斤十二両

滑海藻廿四斤六両 醬末醬各三斗六升八合

酢三斗一升二合 塩三斗一升二合

右、史生校生雜使膳部單七百八十人十二

月大料如件、

(9)

(8)

(7)

一米八石六斗四升別一升六合 塩一斗八合別二斗

海藻六十七斤八兩別二兩

右、拔出仕丁一丁、右火頭十七人、単五百冊人、十二

月大料如件、

以前物、依法充如件、但有不食者、

宜頭来月告朔、又筆墨直錢臨時充

耳、

県大養宿祢「古万呂」

百濟朝臣「東人」

上毛野公

天平宝字四年十二月四日

男 幸 山 本

第二次文書の方は、別稿で検討を加えたので復原についてはそれに譲り、ここでは、この文書の発給主体をめぐって確認されたところを以下の三点にまとめておく。⁽²⁹⁾①文面には差出機関名と宛先が記されていないが、第6紙から第7紙にかけて見える今回充当の食料雑物の品目及び数量が、前記の後一切経料雑物納帳では十二月五日に政所から供給された分とほぼ一致する(十四⁴³⁵)。それ故、本文書は政所から写経所に宛てられたものであり、所属官人の二名が自署を加えていることから見て、これは正文と判断される。②発給主体の政所とは、天平宝字五年六月七日に行われる光明皇太后周忌斎の準備を担当する装束忌日御斎会司と同一実態の官司と考えられる。③この装束忌日御斎会司は、天平宝字四年十月初に写経所を配下に置き、周忌斎一切経書写の主導権を掌握するが、十一月になると、同じく周忌斎の準備を担当していた坤宮官を吸収併合するもの

と考えられる。

これよりすれば、第二次文書の発給主体は坤宮官ではなかったことになる。しかし、十一月以降の装束忌日御斎会司(政所)は、③に記したように坤宮官を吸収併合するのであり、第二次文書もその後のものであるから、これを広い意味での坤宮官発給文書と評価してもさしつかえはないと思う。

それでは、第一次文書は、どのようにして装束忌日御斎会司に入ったのか。この官司は、光明皇太后の崩後に設置された臨時の機関であるので、当然他所からの払い下げによったのであろうが、その職務内容及び右に見た坤宮官との経緯を念頭に置くならば、それは、坤宮官から一括して譲られた反故文書の一部ではなかったかと思われる。となると、第一次文書の宛先は、坤宮官の前身である紫微中台であったことになる。そこで、この想定が妥当であるかどうかを次に検討しておきたい。

まず、第一次文書の状況を見ると、第1紙背から第6紙背までと第7紙背から第9紙背までには、日付の連続性が認められる。これは、藍園からの進上文が日付順に左から右へと貼り継がれていたのを、第二次文書の作成時に、最初は六紙分を剥ぎ取り、次に三紙分を剥ぎ取りもしくは切断して前の分に継ぎ足し、最後にもう一紙剥ぎ取って第二次文書の尾部にあてた結果だと思われる。もっとも、この三回の剥ぎ取りの間に、他の文書への転用もあったかもしれないので、この一〇紙をもつてもの貼り継ぎ状態を復原するわけに

はいかないが、いずれにせよ藍園からの進上文は巻き物状になっていたことは確かである。つまり、それらの宛先は、同一の機関であったわけである。

次に藍園の性格について見ると、第7紙目の進上文の署名者倉垣三倉に資人という肩書がついているのが注意される。資人は、五位以上の有位者もしくは大臣・大納言の職にある者に給される従者であるから、藍園とは、こうした地位にある人物の家政機関に所属する施設と考えられる。その名の如く、この時期に刈入れを迎える藍の栽培がそこでの主務であったのだろうが、進上文から知られるように、瓜・茄子・落といった蔬菜類も並行して作られていたようである。

さて、このような藍園であれば、一連の進上文の宛先は、倉垣三倉の本主の家政機関（家司）と見るのが妥当かもしれない。そうすると、装束忌日御斎会司は、直接この某家からあるいは他の第三者（坤宮官など）を介してこれらの文書を譲り受け、その背面を正文に転用していたことになる。しかし、公の機関が、私の家で不用になった反故文書を再利用していたとするのはやはり不審であり、管見では他にそのような例は見うけられない。それ故、進上文の宛先は、家外に求めた方がよいと思う。

そこで注意されるのは、前掲Cの第一次文書である。現状では、首部の一部や尾部を欠く文書が混じるが、本来は完形で浄清所から来た文書として日付順に右から左へと貼り継がれていたと見られ

る。これらの文書は、二十二日付で進上された漬菜（桃交水葱）と二十六日付進上の新米一斗が、二十九日付解に「御飯料」としてあげられる桃子漬・水葱漬、米五斗内の新米一斗にそれぞれ対応と思われるので、いずれも七月二十六日に行われた大郡宮行幸の用途準備並びに事後報告に関する文書と推定される。

さて、このCの第一次文書を藍園からの進上文と比べてみると、両者間の繋がりを予測させるものとして次の二点を指摘することができる。第一は、進上文の日付は天平勝宝二年（七五〇）五月二十六日から七月六日であるのに対し、Cのそれは同年七月二十二日から二十九日と接近すること、第二は、進上文にある落・萵菁・茄子・瓜・龍葵菜が、Cの二十九日付解では古漬落・菁菹・甘漬瓜・葵菹のように漬物として記されていることである。もっとも、Cの第二次文書は天平宝字二年（七五八）六月、Dのそれは同四年十二月という具合に紙背の利用時期にひらきがあるので、両者は全く別個の内容を伝える文書であり、保管場所（つまり宛先）も異にしていたと見ることもできる。しかし、Eの第二次文書の発給主体は、前記のように坤宮官（紫微中台の後身）を併合する装束忌日御斎会司であり、Cの第二次文書発給主体の紫微中台と密接な関係をもつ。それ故、CとEの第一次文書を全く別個のものとするよりも、保管場所を同じくしつつも何らかの事情で利用時期に差が生じたとした方が、第二次文書の状況にかなっているように思われる。従って、右記の二点は、単なる偶然とはいえず、両者間で何らかの関係

を有していた結果だと考えられるのである。紫微中台の下部組織である浄清所が、食料・土器・衣類のことを掌る点よりすれば、某家の藍園から進上された蔬菜類が、行幸用の漬物として保存処理するためこの浄清所に充てられていたと見なせるのではなからうか。

確認とまではいかないが、以上にあげた第二次文書の発給主体及びCの第一次文書との関係より推せば、藍園の進上文の宛先は紫微中台であった可能性が大きいといえるのである。

二 反故文書の正文転用の意味

男 皇后宮職（紫微中台・坤宮官）反故文書の背面が、写経所宛の正文に転用された実例として確認できるのは、前節で検討した五通の文書である。⁽³²⁾正倉院文書全体よりすれば、それは微々たる数であるが、やはり残るべくして残った文書だろうから、これらに反故文書利用のあり方を問うのは意味のあることだといわねばならない。そのためにもまず、それぞれの第一次文書と第二次文書の作成時を改めてまとめると、次のようになる。

A 天平二十一年（七四九）二月十日——天平宝字四年（七六

〇）十二月二十五日

B 天平勝宝六年（七五四）十一月十二日——天平宝字四年十二月十五日

C 天平勝宝二年七月二十二日～二十六日——天平宝字二年六月二十一日～二十五日

D 天平勝宝三年十一月二十八日——天平宝字二年七月十四日

E 天平勝宝二年五月二十六日～七月六日——天平宝字四年十二月四日

第一次文書については、CとEの間に関係が見出せる他は、これといったまとまりをもたない。しかし、第二次文書の方は、CDは天平宝字二年六月七月、ABEは同四年十二月と時間的な繋がりがあり、また内容も、CDは千巻経及びそれに続く千四百巻経の一連の書写に、ABEは周忌斎一切経書写にそれぞれ関係するものであった。わずかな事例からなので即断は避けねばならないが、ともかく第二次文書の作成時期にまとまりのあることは認めねばならないだろう。

ところで、第二次文書が右の二時期に作られた背景には、次のような事情があったと思われる。すなわち、千巻経と千四百巻経の書写は、料銭供給のあり方から知られるように紫微中台の主導下で進められていること、また周忌斎一切経の書写は、まさに皇太后追悼事業の一環として行われていたことである。そのため、紫微中台及び坤宮官（後に装束忌日御斎会司に併合）は、造東大寺司写経所の活動に深くかわり、書写事業の進展に重大な関心を払うようになる。恐らく、こうした写経所との緊密な関係が、反故文書の正文転用というルーズな伝達法をとらせた一要因だと見られる。

といっても、それは、紫微中台なり坤宮官が写経所を被管扱いしていたためではなからう。A～Eの第二次文書を見ると、そのすべ

てが官人個人（ある場合は複数）の差出しという形をとっており、そこには官司名が記されていないからである。また、各文書の内容は、浄衣・銭・標紙・食料雑物の送付及び膳部の所請といった実務処理のための局面的なものであり、写経事業の運営にかかわるような全体的なものではない。つまり、それらは、官司の総意を反映するというよりも、それぞれの実務を担当する官人らの判断で出された文書といえるのである。従って、正文に反故文書を利用するのは、彼らの裁量に基づくのであり、その反故文書は、所属官司から事務処理用に充当されていたものの一部と考えられる。

このように見ると、反故文書の正文転用は、この二つの時期の写経に限ったことではなく、また応々にしての官司間でも行われていたのではないかと思われる。実際、その可能性は否定できないのであるが、A・B・Eの場合をみると、そこには特殊な事情があったことが知られる。前記のように、これらの文書が作成された天平宝字四年十二月は、坤宮官が装束忌日御齋会所に併合される時期であった。その関係からであろうか、坤宮官は大量の反故文書を一括して処分したらしく、A・B・Eの第一次文書の年紀は天平二十一年から天平勝宝六年に及んでいるのである。これよりすれば、十二月頃の官人の手元には、多数の反故文書が行き渡っており、それを利用する過程で正文への転用も行われたと見るができるだろう。先に見た池原禾守の牒が、十二月になって反故文書の背面に記されるようになるのも、こうした事情によるものと思われる。C・Dについて

は明確でないが、千巻経・千四百巻経、さらには千二百巻経と続く大規模な書写事業に紫微中台が関与する時期であるだけに、事務量の増大に備え多量の反故文書が官人らに充当されていたと想定することもできる。それ故、A・B・Eは、多分に紫微中台・坤宮官内の特殊な事情のもとで現われた実務処理文書であったと見た方が、より状況にかなっているように思うのである。

ところで、いかに多量の反故文書が官人の手元にあったとしても、本来それは、案文作成などに利用するのが普通であった。しかし、それをあえて自らの裁量で正文に転用したのは、宛先となる写経所官人との間に、こうしたルーズな伝達法を容認しうる関係が成り立っていたからであろう。⁽³³⁾ 写経事業は、紫微中台・坤宮官の命をうけて造東大寺司が見積りを出すという具合に、まず官司間で計画が練られて開始されるが、その後の事業運営は、“依頼側”の紫微中台・坤宮官の官人と“請負側”の造東大寺司写経所の官人との連携のもとに進められる。そのため、両官司の官人関係は円滑であらねばならず、親密であることが望ましい。恐らく、このような事業運営上の必要事が、多量の反故文書の充当という事態をうけて、正文作成の面に投影されたのであろう。従って、A・B・Eの文書は、紫微中台・坤宮官と写経所の官人レベルの関係がいかに緊密であったかを示すものとして評価すべきだと思うのである。その点で、造東大寺司と写経所間の場合とは、同じく反故文書の転用がなされていても質的に異なっていたわけである。

A→Eのもつ意味を以上のように見るならば、これより、こうした文書を生み出した天平宝字二年と同四年の二つの写経事業の特異性が読み取れるのではないかと思う。つまり、紫微中台・坤宮官(装束忌日御斎会司)が、被管でない写経所に対し官人レベルで緊密な関係を作り上げ、写経を主導していくという体制の存在である。それは、官司秩序の枠を越えて臨機応変な対応を可能にする便宜的なものと見られるが、このような環境下で事業の遂行がはかられたのが、この二度の写経ではなかったであろうか。もとより、これについては個別的な検討が必要なので詳細は別稿に譲ることにするが、A→Eは、当時の写経所の位置を知る上で重要な意味をもつ文書だと思われるのである。

おわりに

小稿では、皇后宮職(紫微中台・坤宮官)の反故文書の背面が正文に使用された実例を検討し、さらにその意味について考えられるところを述べた。この他に、A→Eの文書が写経所関係文書として残った理由についても考察する必要がある。しかし、そのためには、天平宝字年間の文書群と他の時期の文書群との質的差異という問題にかかわらねばならず、それは小稿のなせるところではない。それ故、ここでは、当該文書の基礎的な考察を果たしたことでひとまず擱筆とし、右の点については他日を期したいと思う。

注

- (1) 初出は『日本経済史大系』1(東京大学出版会、一九六五年)、その後補訂を行って同氏の『律令国家と古代の社会』(岩波書店、一九八三年)に再収。以下、『日本経済史大系』所収の分を吉田氏旧稿、補訂後のものを同氏新稿と称す。
- (2) 皇后宮職が、天平勝宝元年(七四九)八月頃に紫微中台、天平宝字二年(七五八)八月に坤宮官へと変遷する経緯と意義については、瀧川政次郎「紫微中台考」(同氏法制史論叢第4冊『律令諸制及び令外官の研究』(角川書店、一九六七年)所収)を参照。
- (3) 吉田氏によると、造東大寺司は管下の造石山寺所にも同様の伝達法をとっていた。
- (4) 以下、『大日本古文书』編年文書からの引用は、本文のように巻数と頁数を略記し、その文書の所属を提示する。文書名は、原則として『大日本古文书』、『正倉院文書目録』一、二(東京大学出版会、一九八七、八八年)の表記に従ったが、一部内容に即して改称したものがある。
- (5) 「皇后宮職論」(奈良国立文化財研究所学報二二冊『研究論集』II、一九七四年、所収)。以下、本文で言及する鬼頭氏の見解は、すべてこの論文による。
- (6) 「家牒・家符・家解」(『日本史研究』二二六、一九八〇年)。
- (7) 正倉院文書マイクロフィルム紙焼写真(以下紙焼写真と略記)による。
- (8) 十四422→440(『統々修第二帙第六巻、統修第二〇巻』、十五85→87(統修第二二巻)、十四440→442(統々修第二帙第六巻)。この文書の復原については拙稿「天平宝字四→五年における一切経の書写」(『南都仏教』59・60、一九八八年)を参照。

- (9) 天平宝字四年十月十九日付東大寺写経布施奉請状（続々修第四一帙第三卷、四四1～444）、（天平宝字五年）三月四日付奉写一切経所解案（続々修第三帙第四卷、十五36～37）参照。
- (10) 注（4）参照。
- (11) 紙数は第二次文書に基く。後掲E文書の場合も同じ。
- (12) 小杉榎郎影写「東大寺正倉院文書（絵仏師外三）」（国立国文学研究資料館史料館蔵）のマイクロフィルム紙焼写真による。なお、『大日本古文書』にも同様の指摘がある（三42）。
- (13) 紙焼写真によると、第二次文書の第1、2、4、5紙及び第4紙背には付箋が見える。これらは、続々修編成時に貼り付けられたのであろうから、その時には各紙が剝れた状態にあったものと推測される（続々修の付箋については、栄原永遠男「天平十三～十五年における千手経一〇〇〇巻の書写（上）」（『人文研究』三六～九、一九八四年）に言及がある）。恐らく、これ以前に行われた抜き取りの際に各紙を分離した結果だと思われる。となると、現状の如く貼り継がれたのは続々修の編成時ということになり、果たしてそれが原形に復されているのかどうか検証する必要があるが、現時点ではこれを原本調査に期待するしかない。ただ内容から見ると、現状の貼り継ぎには問題は認められず、これをもって原形（欠失部は除く）と見なしでも大過はないと思う。第7紙は、片面が空であったので、継文とは無関係とされ別の巻に収められたのであろう。なお、題籤をもつ往来軸は、第1紙の右側に貼り継がれた表裏空の短冊型の用紙に繋がるようだが、この継文は後述のように紫微中台から写経所に宛てられた注文からなると考えられるので、題籤とは内容的に矛盾しない。この往来軸は本継文のものと見てもよいと思う。題籤に見える「宮」が紫微中台に相当することについては、鬼頭注（5）論文に詳しい。
- (14) 吉田氏旧稿。
- (15) 吉田氏新稿。
- (16) たとえば、天平宝字四年二月から八月にかけての写経所案文を書き継いだ御願経奉写等雑文案は、同二年の写経所の雑文帳の背面を切断することなくそのまま利用している。詳細については、注（8）の拙稿を参照されたい。
- (17) この他、各注文左端の勘検署名も正文であることの一支証となるだろう。
- (18) 天平勝宝四年十月二十二日付奉請経論疏目錄（続々修第一五帙第六卷、十二379～384）に、同四年十一月二日付で紫微少疏として自署を加えるので、この少疏も紫微中台のものと考えられる。
- (19) 紙焼写真による。
- (20) 初出は前掲C・第一次文書、最終は奉写梵網経并四分律充本帳（続々修第一〇帙第二一巻、十六360～362）。
- (21) たとえば、写千巻経所食物用帳。皆川完一「正倉院文書『写千巻経所食物用帳』について」（『東京大学史料編纂所報』8、一九七四年）によれば、この用帳は次のように復原される（以下、巻数と頁数のみを略記）。十三284～288、未収断簡（小川広巳氏蔵）、二十五248～249、十三299～317、二十五232～233、十三473～475、470～473、十四113。
- (22) 千四百巻経及び以下にあげる千巻経、千二百巻経書写の概容については、拙稿「天平宝字二年造東大寺司写経所の財政運用」（『南都仏教』56、一九八六年）を参照。
- (23) 七月六日から始まる経師装潢校生等浄衣請来検納帳（続々修第八帙第九卷、四278～280）は、十日以降の記事を欠いている。

- (24) 十三364→371(続々修第八帙第七卷)、267→268(続修第三〇巻裏)、269→284(続々修第四三帙第六卷)。復原は『正倉院文書目録』二による。
- (25) 天平宝字二年七月三十日付写経所解案(続々修第三八帙第七卷、十三340→346)。
- (26) 天平宝字二年六月二十一日付造東大寺司牒(続々修第八帙第九巻裏、十三242→243)、後金剛般若経経師等食米并雑物納帳(続修後集第一九巻、十四55→58)。
- (27) 千手千眼并新羅索業師経料銭衣紙等下充帳(注(24)参照)。
- (28) 第9紙背の文書は首欠で署名者も他と異なるが、これも藍圈からの進上文と見ておきたい。また、第4紙背の文書で括弧内に示した文言は、第5紙背との貼り継ぎ部分(糊代)に隠れるものと推測される(紙焼写真による)。
- (29) 拙稿注(8)論文、及び「光明皇太后崩後の藤原仲麻呂政権」(直木孝次郎先生古稀記念会『古代史論集』中巻、塙書房、一九八八年、所収)。
- (30) 養老軍防令・48帳内条。
- (31) 鬼頭注(5)論文。
- (32) 管見の及ぶ範囲で検出を試みたので、遺漏があるかもしれない。御示教を賜わりたい。
- (33) 用紙不足という事態も考えられない。しかし、金剛般若経千手索業師経料紙納帳(続々修第三七帙第九巻、十三332→334)や後一切経料雑物納帳(注(8)参照)によれば、紫微中台や坤宮官は写経料紙を供給するので、事務用の料紙(未使用)についても充分確保されていたと思われる。
- (34) 天平宝字四年の書写については、拙稿注(8)(29)論文で検討を
- 試みたが、同二年の書写については別稿を予定している。
- 〈補注〉
- 吉田氏は、造東大寺司政所で反故にされた文書の背面が写経所宛正文に使用された事例として、(天平勝宝七歳)造講堂院所解(続々修第二四巻第七帙、十三157→158。第二次文書は年未詳八月十二日付造東大寺司机進上文、十五308→309)、天平勝宝七歳三月二十七日付造東大寺司解(案)(続修別集第四七巻、四50→51。第二次文書は同歳七月十二日付東大寺政所符、四69)を、造石山寺所宛正文に使用された事例として天平宝字六年七月二十九日付東大寺三綱牒(正集第五巻、五259。第二次文書は同年八月二十日付造東大寺司牒、五271)をあげられている(旧稿、新稿)。